

目次

- ・ 第4回例会報告  
国際交流基金海外日本語センター図書館視察報告（大野亜希世）  
CIE映画『格子なき図書館』について（小黑浩司）
- ・ 編集委員会より
- ・ 「抜刷」の製作について
- ・ 1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会
- ・ 研究例会

第4回例会報告（1996年12月21日 法政大学）

国際交流基金海外日本語センター図書館視察報告

大野 亜希世

（国際交流基金日本語国際センター）

〈1996年9月に、バンコック、ジャカルタ、シドニーにある国際交流基金の日本語センター図書館を視察した結果を、基金の日本語教育関連事業、海外の日本語教育の現状とあわせて報告を行った。〉

1. 国際交流基金について

国際交流基金は1972年に設立された外務省所管の特殊法人であり、その目的は、日本に対する外国の理解を深め、相互理解を増進するとともに、友好親善を促進するため、文化交流事業を効率的に行い、もって世界の文化の向上及び人類の福祉に貢献することである。

組織は、東京にある基金本部を中心として、国内には付属機関として埼玉県日本語国際センター、現在準備中の大阪府の関西国際センター、京都支部がある。そして海外には、1996年2月現在で、日本文化会館がローマ、ケルンに、日本文化センターがジャカルタ、バンコック、クアラルンプール、シドニー、トロントに、事務所がマニラ、ニューデリー、ニューヨーク、ロス・アンジェルス、メキシコ、サンパウロ、ロンドン、パリ、ブダペスト、カイロ、北京に、海外日本語センターが、シドニー、ジャカルタ、バンコック、サンパウロ、ロス・アンジェルス、クアラルンプールに、そしてニューヨークに、ニューヨーク日米センターがある。

基金と同種の活動を行う海外の文化交流団体として、イギリスのブリティッシュ・カウンシル、ドイツのゲーテ・インスティテュート等があげられる。

## 2. 海外の日本語教育の現状

国際交流基金日本語国際センターが1995年3月に発行した『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1993年－』によると、現在海外で日本語を学ぶ人は約162万人存在する。そして、海外で学習者数が多い国・地域は、①韓国、②中国、③オーストラリア、④インドネシア、⑤台湾、⑥アメリカ、⑦ニュージーランド、⑧タイの順に多い。

今回の視察先であったオーストラリアとインドネシアの日本語教育には、学習者の大部分を初等・中等教育機関の生徒が占めているという特徴があり、同様にタイの日本語教育については、高等教育機関で日本語を学ぶ人が多い点があげられる。

## 3. 国際交流基金の海外日本語教育普及事業

国際交流基金では、海外における日本語教育を支援するために、海外の日本語教育機関への日本語教師の派遣や給与・謝金の助成、日本語弁論大会の助成、日本語能力試験の実施、現地日本語教師の日本での研修、日本語教材の制作・寄贈、日本語教育の状況調査と情報交流の促進を行っている。

そして海外日本語センターは、基金事業の海外ネットワークの拠点として、1991年にジャカルタ、バンコック、シドニーに、92年に、ロス・アンジェルズ、94年にサンパウロ、95年にクアラルンプールに設置された。その事業内容は、日本語教育アドバイザーの常駐、現地日本語教師の研修会・研究会の開催や協力、日本語教育関係図書・教材のライブラリーの運営、各種助成事業となっている。

## 4. 海外における日本語教育上の問題点

上記の、『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・1993年－』によると、海外における日本語教育上の問題点は、①適切な教材の不足、②施設設備の不備、③日本の文化・社会に関する情報の不足、④日本語教授法に関する情報の不足となっており、日本語教育に関する情報不足が深刻な問題であることが分かる。そして、海外日本語センター図書館は、基金がその問題に取り組むための重要な拠点である。

## 5. バンコック日本語センター図書館（現在：バンコック日本文化センター図書館）

1991年開館から93年までは、日本語教育に関する図書、ビデオ、カセット、教材のカードなどを収集する日本語教育の専門図書館であった。しかし、93年にバンコック日本語センターが文化センターと同じビルに移転し、図書館はバンコック日本文化センター図書館と統合。現在は日本語教材を含む日本文化の図書館として、現在約3万2千点程の資料を有している。センターで日本語講座や金曜日の日本映画の上映などがあるので、その参加者の利用が多い。主な利用者は、日本人は主婦と子供、タイ人は日本語学習者である。

## 6. ジャカルタ日本語センター図書館（現在：ジャカルタ日本文化センター図書館）

バンコックと同様に、1996年8月にジャカルタ日本語センターが文化センターと同じビルに移転し、図書館はジャカルタ日本文化センター図書館と統合された。現在は日本語教材を含む日本文化の図書館であり、資料数は約2万5千点程である。主な利用者は、日本について学ぶインドネシア人の高校生、大学生。日本人は利用者の10%程で主婦と子供が多い。最近では、利用者からの上級レベルの日本語教材、

専門用語辞典、日本の手紙・論文の書き方、日本語研究に関するニーズが高い。

#### 7. シドニー日本語センター図書館

日本語教育に関する図書、ビデオ、カセット、教材のカード、CAIなどを収集する日本語教育の専門図書館。蔵書数は図書 8,060点、AV資料約 2,370点。(96.9現在) 同じビルの中にシドニー日本文化センター図書館があるが、統合の予定はない。現在コンピュータによる貸出の管理を行っており、順次書誌情報が入力されている。選書は図書館のスタッフと日本語講師で行っており、その運営の姿勢は図書館というより、日本語教育のリソースセンターという方が性格を表している。

#### 8. 海外日本語センター図書館の課題

3つの国はそれぞれに日本語学習者が多く、海外の日本語教育普及の重要な拠点である。そして日本語センターはその支援のために様々な業務を行っている。図書館の運営はその一環であるが、図書館が存在するということと、図書館が日本語教育を支援しているということは意味が異なる。特に日本文化センター図書館と日本語センター図書館の統合は、図書館を担当する部署を曖昧にし、図書館の目的を曖昧にしている。

3つの国は日本語教育が盛んであるため、国内に日本語教材や日本語資料を有する機関も増加しつつある。そういった外部機関との連携や、目的に応じた棲み分けも考えるべき時期に差しかかって来ている。

このような中で図書館には何ができるのか。図書館を基金の日本語普及事業のどこに位置づけるべきなのか。現在の基金の図書館運営の方針と体制が問われている。

### CIE映画『格子なき図書館』について

小黒 浩司  
(土浦短期大学)

連合軍最高司令官総司令部民間情報教育局 (GHQ/SCAP CIE) 映画『格子なき図書館』が製作されたのは1950年、すなわち図書館法が公布された年である。つまりこの映画は、図書館法の周知・徹底のために作られた、CIEのプロパガンダ映画とみてよからう。

この映画のプロローグは、竹田というサラリーマンの図書館体験である。彼の利用した図書館は、戦前の日本の図書館の実態を表しているが、これはまたCIEの図書館担当者がみた日本の図書館の姿でもある。有料公開、閉架制、目録の不備、陰気で重苦しい閲覧室……。CIEの図書館担当者の目に映った日本の図書館は、「暗く古く単に書物倉庫に過ぎなかつた。」

これに対して、新しい図書館の代表として紹介されるのが、仙台図書館、新潟県立図書館、千葉県立図書館のBMである。

映画のタイトルの由来でもある新潟の自由接架が、どのように行われていたかを確かめることができるのは当然であるが、その他にも注目すべきシーンがある。

まず、仙台の児童図書室、同室における映画会、また新潟の児童室、同室における人形劇や貼り絵の様子と、児童サービスが強調されている。

次に、視聴覚サービス。仙台および新潟の視聴覚ライブラリーが登場し、映画、スライド、写真、レコードなど、図書以外の資料の提供が紹介されている。

そしてそれら各種資料を活用した、集会・文化活動。前掲の映画会、人形劇のほか、絵画の展覧会、新着図書の展示など、実に多彩な内容となっている。

新潟の巡回文庫、千葉の移動図書館の紹介には、長時間を割いている。文庫が船で、あるいは雪の山道を背負って運ばれ、BMが文字どおり野を過ぎ山を越えて走っていく様が延々と映し出されている。

つまりこの映画の内容は、先に指摘したように、図書館法に基づく戦後図書館改革の筋道を示したものといってよい。図書館法を今一度確認するために、また戦後日本の図書館史を検証する上で、映画『格子なき図書館』は貴重な存在といえる。

だがこの映画については、その製作の過程、英語版と日本語版の内容の相違など、まだ不明の点が多い。今後の研究が待たれるところであり、その第一歩として、この映画のリプリントを提唱したい。

---

## 編集委員会より

前号でご案内しましたように、『図書館文化史研究』第13号（1996）が昨年末に発行されました。すでに会員の皆さんのお手元にも届いたと思います。新生『図書館文化史研究』に対するご意見などをお聞かせ下さい。（小黒）

---

## 「抜刷」の製作について

『図書館文化史研究』の第13号から、著者に抜刷20部を進呈することになりました。出版を引き受けてくださってる日外アソシエーツ（株）から、未製本状態の本誌を提供していただけることになりましたこと、この場を借りてお礼申し上げます。なお、「抜刷」の製作にちなんで小川徹氏から資料の提供がありましたので紹介します。（事務局）

《大正の末、雑誌「民族」の編集をやっていたころ、著者用の「抜刷り」づくりの仕事を私が手伝われたのも、このエクステンション・ルームでのことだった。印刷所から届いた未製本の折り畳まれたままのページを、紙ナイフで論文別に切り分け、ホッチキスで綴じ合わせる仕事で、手伝いながら私は「杖の成長した話」…などという奇妙な標題を、心に留めるともなしに留めていた。》

（柳田為正『父 柳田国男を想う』筑摩書房、1996、p.79）

## 1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会のお知らせ

下記の要領で、標記研究集会・総会を開催いたします。詳しい内容は、5月発行の「ニューズレター」でご案内いたします。

記

日時：1997年9月14日（日）～15日（祝）

場所：東京（予定）、会場は未定（4月に確定の予定）

テーマ：“図書館文化史について”を中心に検討中

当日の〈テーマ〉の内容については、3月の運営委員会でさらに検討する予定です。テーマとは関わりなく（自由な論題での）発表者も募集します。発表を希望される方は、事務局中林までご連絡ください。（事務局）

### 原稿募集

- ◇ 『図書館文化史研究』15号（1998年9月刊行予定）の原稿を募集します。原稿の締切は98年3月末日です。投稿を予定される方は、下記までご一報下さい。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

問い合わせ、並びに原稿の送付先

小黒浩司

- ◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局あてお送りください。

### 新入会員

\*

\*は再入会

### 住所変更

ナ

### 会員名簿訂正

## 研究例会のお知らせ

### 第5回

日時：1997年3月8日（土）午後1時～3時（予定）

場所：法政大学 69年館 5F 951教室

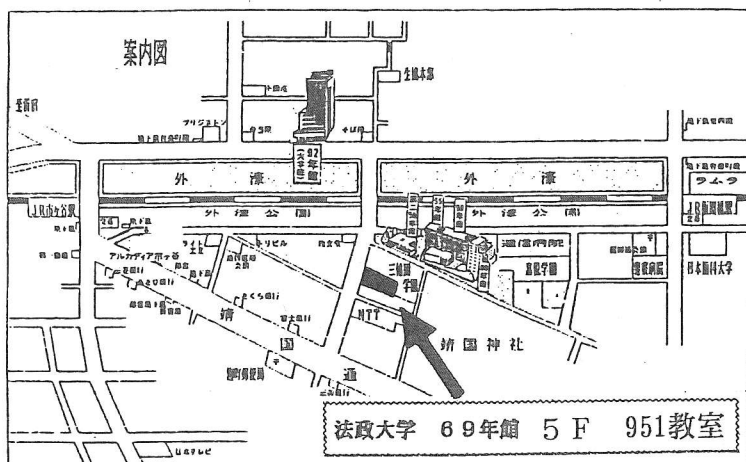
発表：伊香左和子（横浜国立大学）：ハンガリー国立図書館の歴史

稲村徹元（埼玉純真女子短期大学）：出版法改正問題と帝国図書館

#### ◇次回の予定

1997年6月 日時・場所は未定

\* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流（提供）などでも結構です。申込みは事務局まで。



#### ◇事務局からのお知らせ

「ニューズレター」の前号で、浪江虔氏から『図書館そして民主主義 浪江虔論文集』（ドメス出版）が寄贈されたことを報告しました。その後、出版記念会における同氏の挨拶文《出版を祝う会でのお礼のあいさつ》（1996年11月8日）（B5で4p）が寄贈されました。ご希望の方は、事務局までご連絡ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明